

ふわっとした 図書館時間の ススメ

経済学部 古川 雄一



図書館というと、厳肅な堅苦しいイメージを持っている学生も少なくないのではないのでしょうか。それもあってか、図書館から学生の足が遠のいているという話をしばしば耳にします。よくメディア等でいわれるいわゆる「若者の本離れ」も日々学生と接している中で私も感じていることですが、図書館離れの一因かもしれません。

しかし私にとって図書館という場所や読書という行為は、決して堅苦しいものでなく、大学の中で人生の中で、最もリラックスできる場所・行為です。そこで過ごす時間をラフに形容するならば、ふわっとした自由時間、という言葉が浮かびます。

この文章では、学生の皆さんを仮想読者に想定し、私なりの図書館の利用法、読書法を実体験に基づいて、お伝えしたいと思います。そうすることで伝えたいメッセージは：

- 1.本の読み方に決まりはない、例えば、途中から読んだり、つまみ読みもいい
- 2.図書館の利用法もひとそれぞれ、友達との待ち合わせや、暇つぶしもいい

この小文によって、少しでも図書館、書物を身近に感じてもらえればと思っています。

大学図書館との出会い

昔話になります。もう20年以上前、1990年代後半のことですが、東京の大学に通っていたころ、私は大学図書館のヘビーユーザーでした。

とはいえ、入学当初は単に本を借りる目的だけで、10分程度の短期滞在でした。おそろおそろ入館してお目当ての本を探し出し、緊張しながら貸出デスクで手続きをして、逃げるように退散(退館?)するだけで。このよう

な短期滞在を繰り返す中で、あることに気が付きました。図書館の利用方法は多種多様、ひとそれぞれということです。

図書館の使い方はひとそれぞれ

1990年代後半の大学図書館には、実にさまざまなタイプの学生が、実に多種多様な図書館の使い方をしていました。

読書目的はもちろん、友達との待ち合わせに使っている人、次の授業までの空き時間に、雑誌を読んで暇つぶししている人などなど…なかでも特に私の気を引いたのは、図書館内の机にどっしり腰を下ろしている、いかにもその場所にずっといますという雰囲気のある学生たちでした。彼らは机に向かいながら、小説を読んだり、教科書や専門書を机に積み上げて勉強していたり、カバンを枕に寝ていたり、めいっばい本を積みながらただただぼんやりと音楽を聴いていたたり……。

私の図書館時間

私の図書館時間は次のようでした。図書館に入ると、まずは自分のお気に入りの机にカバンをおいて、居場所を確保。それから小説やら(経済学部の学生だったので)経済学関連の本などを、適当に選んできて机の上に置く。明確な目的がないので、そこで過ごす時間は特定の形を持たず、ふわふわしていました。偶然出会った友達と小声でおしゃべりしたり、お互いの本を紹介しあったり、待ち合わせ場所に使うこともありました。1人になれば、勉強しなければ勉強する、寝なければ寝る、ただひたすらぼんやりする……。

図書館がもつ独特の雰囲気のおかげで、不思議と周囲の目は気になりません。もちろん、興が乗れば、机に積んである本一だいたい、小説や経済学の教科書でしたーを読み始めます…。

本の読み方に決まりはない

小説は、大学時代は特に、日本の作家のものをよく読みました。そのころは忍耐力がなかった(今でもたいしてありませんが…)、長編よりは、短編、中編くらいの短めの小説が好きでした。

「小説を読む」というと、最初から読み始めて、きちんと内容を把握しつつ、最後まで読み通さなくてはいけない、と考える人も多いと思います。もちろんそれは、非常に正統派で、素晴らしい読書法です。

しかし、図書館・本の世界は自由の象徴です。どんなふうにも読んでもいい。私の好きな昭和の文学者・批評家である小林秀雄は、晩年、ある講演会で、自分の著書を買った人に向けて、自分の本を買ったからといって別に読まなきゃいけないって義務はない、というようなことを、冗談めかして言っていました。買って借りても、読まなかったっていいし、どんなふうにも読んでも構わない。と、私は思うわけです。事実、私の研究室の本棚に並んでいる書籍—小説から評論、もちろん経済学の専門書もあります—の中で、最初から最後まできちんと読み通したことが1回でもあるものは、せいぜい10%程度だと思います(さすがに少し恥ずかしいですが…)。

私の読書体験 1

最初から読まないこともある

小説の場合、まず新しい本を買って・借りてきたら、多くの場合は、最初から読み始めます。が、気分次第ではそうでない時もあります。「先生」に怒られそうですが、特に現代小説の場合、最初に「あとがき」を開いてしまうことも、しばしばあります。深い理由はないです。強いていうなら、私

は食パンを食べるとき、まず耳から食べ始めることがあるのですが、その感覚と少し似ている気がします。いきなり中心にむかわず、周縁部分から遠巻きに近づいていく感じです。

「あとがき」を先にチラ見して しまった現代小説



〈一例〉
五分後の世界
村上 龍 著
(幻冬舎文庫 1997)
豊図開架 913.6:Mu43

村上龍は大好きな現代作家ですが、直近に読んだ何作かにあまりのめりこめなくて…。この本は、文庫が出た時に買いましたが、あまり期待していませんでした。たぶん、そんなくらいの理由で、「あとがき」から読み始めたのでしょうか…。ただ、著者自身による「あとがき」(実際は作品の一部)が、なんとも村上龍的でかっよよく、すぐに最初にもどって、一気に読み倒しました。

「気づくと、硝煙漂う泥濘を行進していた小田桐……。現在より五分時空のずれた地球では、もう一つの日本が戦後の歴史を刻んでいた。屈指の戦闘国家日本の聖戦を描く、鮮烈なる大長編。」(※1)今の学生が読んでも、きっと面白いと思います。

私の読書体験 2

10年以上かけて読了し、 座右の書になることもある

本を読み始めて、退屈して途中で読むのをやめることも多いです。これが、私の本棚を、読了していない本が占めている理由ですね。しかし、これは年を重ねて実際に起きたのですが…大学生の時に途中で読むのをやめて、ずっと放置。大学卒業後、大学院に進学して、紆余曲折、なんとか大学教員として働き始めて数年たった時、ふと思いついて読み返してみると、面白くてびっくり、という本がわりとあったりします。

評論だと、小林秀雄『Xへの手紙』、

吉本隆明『共同幻想論』などです。前者はもう40近いときに再読してはまって、いまや小林秀雄は全集を集めて熟読しているほどです。20年弱かかって得た座右の「作家」ですね。大学生の時は正直難しくさっぱりでしたが、いま読むと不思議とずっと入ってきました。小説の方は、さらにいろいろあるのですが、例えば…

30代半ばで読み直したら、 大好きになった小説



〈一例〉
津 軽
太宰 治 著
(新潮社 1951)

太宰治は大学時代はかなり熱中して読みました。性格的に、全作品・全書簡を網羅、という感じではなく、お気に入りの作品を何度となく読み返す。『斜陽』のような長めの作品から、『魚服記』、『如是我聞』など短めの作品を、いまに至るまで愛読してきました。ただ、中にはピンとこないものもあって、例えば『津軽』。

『津軽』は、「昭和19年、津軽風土記の執筆を依頼され3週間にわたって津軽を旅行した」「自分の故郷を訪問した」際に執筆した作品です。(※2)本編の冒頭に、「ね、なぜ旅に出るの?」「苦しいからさ。」(※3)

という会話があります。20歳前後の私には、苦しいときになぜ旅に出るのかが全く理解できなかった。苦しいなら、対策を講じなきゃ、旅に出ている場合じゃないでしょと。でも30も半ばを過ぎて、ふと思いついて読み返したら、苦しいから旅にでるという心境がなんとなくわかるような気がしましたね、不思議なものです。初見から15年かけて愛読書になりました。

以上、私の図書館利用法、読書法を、体験を交えつつ紹介しました。言い換えることは、(周囲の迷惑にならない等のルールさえ守っていれば)図書館は好きなスタイルで利用していいということ、読書も決まったやり方ではなく、流し読みでもつまみ読みでもあとがきから読んでもいい、ということです。ぜひ自分なりのスタイルで図書館時間を楽しんでください!

私の読書体験 3

読み返して、 新発見があることもある

読み直したら、 大好きになった小説



〈一例〉
ソードアート・
オンライン
川原 礫 著
(電撃文庫 2016)

もう4、5年前のことになりますが、次男に「ソードアート・オンライン—オーディナル・スケール—」というアニメを観に行きたいと言われ、まだ一人で映画館に行けるような年齢ではなかったので、一緒に行くことになりました。まったく予備知識なしで行くのもあれだと思ひ、予習のために読んだのが、この本です。

『これは、ゲームであっても遊びではない』クリアするまで脱出不可能、ゲームオーバーは本当の“死”を意味する…』というエキサイティングな設定の、いわゆるライトノベル・ジャンルにくられる小説です。(※4)

中高のころ、「スレイヤーズ」というライトノベルにはまったりしていたので、ライトノベルに偏見や先入観をもっていないつもりでしたが、どうしても身を入れて読むことができず…ページをパラパラめくって、ちょっと目についたところだけをつまみ読みする程度しかできませんでした。

しかし、映画を観て、素直に感動しました。もともとテレビ版のエヴァンゲリオンにはまったり、アニメが好きだったのもありますね。観終わった後、これはいけないと思ひ、すぐに小説を読み直しました。今度は最初からノンストップで、一気に読み倒しました…。

(※1) 幻冬舎のサイトより <https://www.gentosha.co.jp/book/b2275.html>
(※2) 新潮社のサイトより <https://www.shinchosha.co.jp/book/100604/>

(※3) 青空文庫より https://www.aozora.gr.jp/cards/000035/files/2282_15074.html
(※4) 電撃文庫のサイト <https://dengekibuncho.jp/product/sao/200903000507.html>